



Title	精神分裂病家族のコミュニケーション
Author(s)	林, 正延
Citation	大阪大学, 1970, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/30419
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

[65]

氏名・(本籍)	はやし 林	まさ 正	のぶ 延
学位の種類	医	学	博 士
学位記番号	第	2 1 5 4	号
学位授与の日付	昭和 45 年 12 月 15 日		
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当		
学位論文題目	精神分裂病家族のコミュニケーション		
論文審査委員	(主査) 教 授	金子 仁郎	
	(副査) 教 授	吉井直三郎 教 授 岩間 吉也	

論 文 内 容 の 要 旨

〔目 的〕

精神分裂病の家族研究は、近年ますます重視されている。しかし家族という集団の力動は、その客観的・実証的研究が甚だ困難である。とくに家族自体の特性を、包括的・数量的に表現するのは、まだ十分な成果がない。この研究は、家族内Communicationを通して、これを解明しようとするものである。

〔方法ならびに成績〕

ここでは、Family Rorschachによって、家族内Communicationを得た。これは、Rorschach cardを家族全員で解釈させ、この間のCommunicationを資料に用いる。発言回数・分布・消費時間その他の要素を測定し、これを総合して家族固有のpatternを求める。

対象は、分裂病家族11例（S群）、正常を含む非分裂病家族9例（N群）である。

家族討議に要した消費時間・発言回数・頻度を求める。これからCommunication密度を概略的に把握する。この結果、各家族はさまざまな特異性を示したが、一般的にはS群のCommunicationは貧困であり、粗雑なことが指摘できた。

つぎに、家族員別の発言分布を求めた。これから、家族員の発言権・主導性などが推測されるが、後述する諸要素を加えることで、その家族全体のもつ家族的協調性をも求められる。この結果、S群では明らかに不均等分布であり、これを詳細に解析すると、かかるS群家族の中には、父権の甚だしい強大さが家族的均衡を破壊するに至ったものや、逆に家族員を集束し、Communicationを容易にする中核的存在がないため、家族的協同が困難になったものなどが認められた。

つぎに、沈黙状態について、頻度・平均持続時間・発生部位を検討した。S群では頻回・長時間の

沈黙が発生しており、N群と極端な相違を示した。好発部位では、N群は実質討議期に好発したが、S群では初頭緊張・討議終結期に好発した。かかる機制を深く追求して、S群では家族員としてのrole playが確立されず、彼らが主体的存在としての自覚に欠くことを例証した。

つぎに、対話の持続度・ある個人の対話への参加度を検討した。これの家族的・個人的patternを解析することで、単位発言のCommunicating effectや、家族員の共同体意識の程度が求められる。この結果、S群は対話の連続性が低く、継起が障害的であることが認められた。これは、彼らの発言態度が自己閉鎖的であり、Cooperationの構えを基本的に喪失していることを意味し、主題の熟成・課題の解決が甚だしく障害されていることを示すものである。

さらに発言態度の別な側面である、発言者の相手への指向性、受容者の受身の指向性のあり方を検討した。ここでもS群の劣質性が明らかにされた。前述およびこの要素は、情報の心理的密度の測定でもあるが、この解析の結果、S群のこの点の欠陥性は、病者であるよりも、むしろ両親の側に存在することが明らかになった。これは、分裂病家族研究に重要な示唆を与えるものと考えている。

終りに、討議中に産生された反応、討議成果である反応の量・質を検討した。S群では、情報量と情報の相互交換性の貧困がある上に、現実を無視した歪曲加工が容易になされていること、かかる非合理的解決になんらの抑制がないことが明らかになった。

論文は続いて、個々の症例検討を行なっている。そこでは、生活史的追求と精神医学的面接結果の集積から得られた家族特性が、家族内Communicationの解析結果と一致することを、数量的・実証的に論証した。

〔総括〕

従来の方法論では、甚だ困難であった分裂病の家族研究に、新しい包括的・客観的な解析技法を呈した。

この追求の結果、分裂病家族では、真の相互的な関係が成立せず、豊かな調和をもたない結合に止まること、家族員間に深刻な断裂があること、彼らが自らの主体性を根元的に喪失していることが、そのCommunicationの不毛性に集約されていることを明らかにした。

つぎに、結果の一部を表に示す。

評 点	N 群			S 群		
	A	B	C&D	A	B	C&D
発 言 状 態	3	2	4	0	4	7
発 言 の 均 等 性	4	2	3	2	5	4
沈 黙 状 態	9	0	0	4	3	4
平 均 対 話 量	2	4	3	1	2	8
独 語 量	2	4	3	0	5	6
指 向 性	4	3	2	1	2	8
応 答 性	3	3	3	1	2	8
不良反応呈示度	4	4	1	0	2	9
不良反応採用度	8	0	1	4	1	6
採用反応一致度	5	4	0	1	2	8

表は、F. R. の主要指標の成績である。これは、各測定値について、全家族の平均値を基準とし、それから上下に標準偏差量ごとに4段階に区分する。それに、良好な意義づけをもつものから順に、A～Dの評点を与える。この表は、各評点を得た家族数のNS両群の比較表である。これによって両群の差異をかなり明瞭に把握できる。たとえば、発言状態でみると、評点AはN群では3家族が獲得したが、S群は該当家族がなかった。逆に、異常域と判断される評点C・Dでは、N群では4家族にすぎなかったが、S群では7家族に達している。

論文の審査結果の要旨

この研究は、精神分裂病の精神病理学的研究の中でも、とくに重要視されるに至った家族力動を実証的に解明するため、家族ロールシャッハ法の新しい解析手段を完成させ、家族員間のコミュニケーションのあり方を具体的に把握し、従来かえりみられなかった因子を確認し、それを有機的に総合することに成功した。

これによって分裂病家族、とくにその両親がもつ病理性を明解に例証し、真の相互関係をもたないこと、家族員間に深刻な断裂があることなどの家族力動を、量的に把握し、従来の仮説を教量的に実証したのみならず、いくつかの新知見を提示した。